九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『長生殿』訳注（七）

竹村, 則行
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授 : 中国文学

https://doi.org/10.15017/9626

出版情報：中国文学論集. 30, pp.105-123, 2001-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『長生殿』訳注（七）

竹村則行

凡例

一　『長生殿』本文の底本には、現在最も流布している徐朔方氏の校注本を用いたが、厳密な校訂を施した呉梅校本（劉世珩『彙刻伝劇』所収）を始め、次の第二項に掲げる諸書も随時参照した。

二　本訳注に当り、出典の確認や本文の解釈等に以下の諸書を随時参照したが、訳注の際にはこれを一々明示していない。

塩谷温『国訳長生殿』（『国訳漢文大成』所収、一九二三年）

徐朔方校注『長生殿』（人民文学出版社、一九五八年）

曾永義『中国古典戯劇選注』所収『長生殿』（国家出版社、一九七四年）

蔡運長『長生殿通俗注釈』（雲南人民出版社、一九八七年）

三　本訳注では、主に前記参考書に於てなお未注の故事出拠等について注出する事にした。全般的総合的な注については、康保成・竹村則行共著『長生殿箋注』（中州古籍出版社、一九九九年）を参照されたい。

四　**【曲牌名】**に続く「唱」部分の訳出は、時にこの間に挟まれる短い科白や襯字をも含めて、**【ゴチック文字】**の体裁で示した。また、演員の扮装や動作、および唱や動作の主体を示すト書きの部分は、底本の通りに小字で示した。

五　訳語のうち、原文の「介」「科」（しぐさ）は、一種の術語として、そのまま「介」「科」として訳出した。

六　訳文は、**【ゴチック文字】**で示した「唱」部分の訳出を含め、荘重な韻文の形式を採らず、意味内容の解釈を重視しつつ、努めて

平易な日本文となる様に留意した。（「唱」部分の韻文訳出は今後の課題である。）それでも、訳者の誤解や力量不足による生硬な訳文を免れなかったかも知れない。諸先生の忌憚無い御指教をお願いする次第である。

七　前稿「『長生殿』訳注（一・二・三・六）」は『中国文学論集』二十六～二十九号（九州大学中国文学会、一九九七～二〇〇〇年）に訳載し、また、同（四・五）は『文学研究』九十七～八（九州大学文学部、二〇〇〇～〇一年）に訳載した。

八　本訳注（七）（第二十五～二十八齣）は、一九九九年十二月～二〇〇一年一月に行われた九州大学大学院での『長生殿』演習資料を基にして、担当の竹村が新たに浄書した。この間の演習に参加した助手・院生・研究生は次の通りである。

黄　冬柏　・　角田　美和　・　王　展　・　蕭　燕婉　・　王　毓雯　・
河野　真人　・　垣見美樹香　・　土屋　聡　・　王　暁霞

第二十五齣　埋　玉

【南呂過曲】【金銭花】（末が陳元礼に扮し、兵士を率いて登場）軍旗を抱き、鉞（まさかり）を手にして前進する、前進する。近衛軍が天子の御車を守る、天子の御車を守る。天子は慌しく敵軍を避けて蒙塵する。一行は山河を跋渉し、険しい山道が続く。一体いつになれば、めざす成都に着くのやら。

某は右龍武将軍の陳元礼です。安禄山が謀反して潼関が破られたので、天子は兵乱を避けて蜀に行幸され、私に近衛軍を統括して従駕するように命ぜられました。もう少し行くと、早や馬嵬駅だ。（内で太鼓をたたいて騒ぐ介）（末）兵士達はどうして騒いでいるのだ？（内で）安禄山が造反して、天子が蒙塵されたのは、みな楊国忠が権力を壟断し、国乱を招いたが為だ。この賊臣を誅伐しなければ、俺たちは死んでも御車に随行しないぞ。（末）兵士達よ、そう騒がずに、まあ落ち着いてくれ。私が天子に奏上すれば、御裁可があるであろう。（内で応ずる介）（末が兵士を率いて「一行は山河を跋渉し」以下の四句を繰り返し唱って退場）（生が旦と共に馬に乗り、歩いて従う老旦・貼・丑を連れて登場）

【中呂過曲】【粉孩児】慌ただしく宮殿を後にすれば、玉の涙がしとどに流れ落ちる。うら寂しい天子の乗り物は嘆かわしく、目指す成都は天の果て。[1] 進むほどに京都は遠ざかり、山河は至る所荒れ果て、[2] 眼前に二三軒の破屋があるばかり。

（丑）ここはもう馬嵬駅です。陛下、どうか御車をお止め下さい。（生と旦が馬を下り、中に入って坐る介）（生）朕は不徳のために誤って逆臣を寵用し、この亡命を招いたが、今更後悔しても及ばない。貴妃よ、卿にまで累を及ぼし、苦労させるが、これをどうしたものか。（旦）私めは天子様に随従するのが当然ですし、どうして苦労など厭いましょう。願わくは一日も早く賊を破り、天子様が長安に還御できればと存じます。（内で又大声で叫ぶ介）楊国忠が大権を独占して国を誤らせ、今また吐蕃に内通した。我らは決してこんな賊と生死を共にはしないぞ。楊国忠を殺そうと思う者は、我々について来い。（雑が四名の兵士に扮し、刀を持ち、副浄を追って登場し、舞台を駆け回る介）（兵士が副浄を殺し、鬨の声をあげて退場する）（生が驚く介）高力士よ、外はどうして騒いでおるのだ？　早く陳元礼を呼んで参れ。（丑）承知しました。（命を伝える介）（末が登場して謁見する介）臣陳元礼がお目通り致します。（生）兵達はどうして鬨の声をあげておるのだ？（末）陛下に申し上げます。楊国忠は大権を壟断して国乱を招き、更に吐蕃と内通しましたので、激怒した近衛軍が竟に楊国忠を誅伐致しました。（生が驚く介をする）おお、そんな事が！（旦が背を向けて涙を拭う介をする）（生が深く考え込む介）それもまあ、やむを得ん。命令を出して出発するのだ。（末が外に出て命を伝える介）詔命である。お前達の殺人の罪を赦すから直ちに出発するように。（内で又騒ぐ介）楊国忠は誅伐したが、楊貴妃がまだいるぞ。貴妃を殺さねば、我らは断じて随行しないぞ。（末が生に謁見する介）兵士達が申すには、楊国忠は殺したが、貴妃様がまだおられるので、出発できぬとのことです。陛下には、どうか私恩をかえりみず、大義によってご処断されますよう。（生が大いに驚く介をする）おおっ、これは何という事を言い出すのだ！（旦が慌てて生の衣服を引っ張る介）（生）陳将軍よ、

【紅芍薬】楊国忠は断罪すべきであったとしても、彼は現に誅殺されてしまった。しかし貴妃は深宮にあって天子に随従していたのであり、どうして近衛軍の疑惑を招くことがあろう。（末）詔命は極めて明快なのですが、今や軍心が変わってしまい、どうしようもありません。（生）お前はすぐに彼らに伝えよ、このような狂暴な要求は君臣の

上下をわきまえない無分別なものであると。（内で又騒ぐ介）（末）陛下、近衛軍がこの様に激昂しているのに、小臣がどうして鎮圧できましょう。

（旦が大声で泣く介）陛下、

【耍孩児】私は突然の非常事態に大変驚いています。兄が殺されて悲しみ痛むこの私にまで災難が降りかかるとは、どう致しましょう。これは前世の定めなのでしょう、薄命の私は罰を受けるべきです。どうか陛下には私めを早くお見捨てになり、一言「死を賜う」とのご下命を…。

（生）貴妃よ、ちょっと待て。（内で又騒ぐ介）貴妃を殺さねば、我らは死んでも随従しないぞ。（末）陛下に申し上げます。貴妃には罪は無いとしても、楊国忠はその実兄であり、陛下の身辺におられるのでは軍心は安まりません。軍心が安定すれば、陛下も安全です。どうか陛下にはご熟慮を。（生が深く考える介）

【会河陽】言葉も無く考え込めば、心は千々に思い乱れる。（旦が生の衣服を引っ張って哭く介）痛ましくて、どうして陛下を置いてゆけましょう。（合唱）哀れにも一対の鴛鴦が波風に打ちしだかれ、こんな横暴な目に遭うとは。（内で又騒ぐ介）（旦が哭く介）兵士達が迫り来て、私は驚きおののく。（生が呆然として、急に旦を抱いて哭く介）貴妃よ、全くどうにも仕様が無いのだ。

（兵士達が鬨の声をあげて登場し、舞台を回って、駅を包囲して退場する）（丑）天子様、外の軍隊が駅を包囲しました。これ以上遅延すれば、異変が出来するやも知れません。如何致しましょう。（生）陳元礼、すぐに行って軍隊を鎮めるのだ。朕は考えていることがある。（末）承知しました。（退場）（生と旦が抱き合って哭く介）（旦）

【縷縷金】心は震えおののき、涙がこもごも流れ落ちる。（生）堂々たる天子の権力を以てしても、あの莫愁が嫁いだ魯家にも及ばないとは。（共に哭く介）天子に受けた恩義をどうして瞬時に棄て去ることができようか。（旦が跪く介）私めが受けた深い天恩は、一身を以ても償い報いることができない程です。いま情勢は急を告げておりますので、どうか私めに死を賜り、兵士達の怒りを鎮めて下さいませ。陛下が無事に蜀に着く事ができれば、私めは死んでも生きているのと同じです。思いますに、兵乱を鎮める術は他にありません。私めはこの生命を捧げたく思います。

（哭いて生の懐中に倒れ込む介）（生）貴妃、何を言うか！　もしそなたが命を落とせば、朕は天下の権力、四海の財産があっても、それが何になるであろう。例え国家が滅亡しようとも、決してそなたを見捨てはしないぞ。

【攤破地錦花】彼らがこうして縦ままに騒ぐのを、朕はずっと耳と口を覆って無知を装って来たが、全ては朕の誤りであった。いま一朶のあでやかな花（楊貴妃）**が捨てられ、風雨に摧かれて天の果てに絶命するのを、どうして見るに堪えられよう。もし彼らが更に迫るのであれば、朕がそなたに代わって、この黄砂の地に果てようぞ。**

（旦）陛下のご恩は深甚でありますが、事態がここまで至れば、私が生き延びる術は他にありません。もし未練を残して私が生き延びても、陛下ともどもはかなくなれば、私の罪は益々重くなります。どうか陛下には私をお見捨てになり、国家の安泰を保たれます様。（丑が涙をおおい、跪く介をする）貴妃様は意気高く正義のために命を投げ出す決心をされました。陛下にはどうか国家を重んじられ、強いて私恩を割愛されます様に。（内で又喊く介）（生が足を踏みならして哭く介）ああ、だめだ。貴妃の決意は固く、朕もどうすることもできない。高力士、た、ただ貴妃の言う通りにせよ。（涙にむせび、顔をおおって哭いて退場）（旦が天子に拝する介）天子様！（哭いて倒れ込む介をする）（丑が内に向かう介）兵士達よ、聞け。天子の詔旨が下り、楊貴妃に自尽を賜ったぞ。（兵士達が内で叫ぶ介）万歳、万歳、万万歳！（丑が旦を助け起こす介）貴妃様、裏手へ参りましょう。（旦を助けて行く介）（旦が哭く介）

【南呂引子】【哭相思】生涯の別れ目はいまこの時、当代きっての美女が君王の為に命果てる。

（舞台をぐるっと回って着く介をする）（丑）ここに仏堂がございます。（旦が進入する介をする）少し待って。私に仏様へ拝礼させて下さい。（拝礼する介）仏様、仏様、思えば楊玉環は、

【中呂過曲】【越恁好】罪業深く、更に罪業深いものですが、どうか仏様にはこの私を済度させて下さいませ。（丑が跪いて哭く介）貴妃様、何かお言葉があれば、私めにお申し付け下さい。（旦）高力士、天子はお年を召されており、私が死んだ後は、あなただけが昔から仕える人となりますから、御意をよくわきまえて、気を付けてお仕えするのです。更に、私に代わって天子に伝えて下さい、以後、私のことはお忘れ下さいと。（丑が哭いて応ずる介）承知致しました。（旦）高力士、もう一言あります。（金釵を抜き取り、鈿盒を取り出す介）この一対の金釵と一枚の鈿盒は、天子様が結婚のしるしとして私に下賜されたもの。あなたはこれを持って、私と一緒にお墓に葬って下さい。決して忘れてはいけ

ませんよ。（丑が金釵と鈿盒を受け取る介）承知致しました。（旦が哭く介）**悲痛で腸（はらわた）は千切れ、言い尽くせぬ愁恨に心は千々に乱れる。**（末が兵士を率いて勢いよく登場する）楊貴妃は既に死を賜った。諸君はどうしてぐずぐずして御車の出発を遅らせるのだ。（兵士が鬨の声をあげる介）（丑が進み出て遮る介）兵士達は近づいてはならぬ。楊貴妃様は間もなく天に召される。（旦）お、陳元礼、陳元礼、お前は**兵力を逆賊に向かわせるのでなく、私に自殺を強いるのかえ？**（兵士が又鬨の声をあげる介）（丑）大変だ。兵士どもがどっと押し寄せてきたぞ。（旦が見る介）ああ、もうだめ、だめだわ。ここにある梨の樹[3]が私楊玉環の最期の場所だわ。（腰から白い絹布をほどき、天子に拝礼する介）私楊玉環は天子様のご恩に深謝致します。これ以後、二度とお目にかかることはございません。（丑が泣く介）（旦が哭いて首をくくる介をする）天子様、私の**生命は死んで黄泉の底にありますが、私の霊魂はずっと天子の御旗と共にあります。**

（縊れ死ぬ介をして退場）（末）楊貴妃は死んだ。兵士達はすぐに退け。（兵士達が応じて退場）（丑が哭く介）貴妃様。（退場）（生が登場）「近衛軍が出発しようとせず、どう仕様もない。美しい眉根の楊貴妃があえなく朕の馬前に死んでしまった。」（丑が白い絹布を持って登場し、生に会う介）天子様に申し上げます。楊貴妃様が天に帰られました！（生が呆然として応じない介）（丑が更に申し上げる介）楊貴妃様は天に帰られました。自ら縊られた白絹がここにございます。（生が見て大いに哭く介）おお、貴妃よ、貴妃よ、何と朕を悲痛させることよ！（倒れる介）（丑が助ける介）（生が哭く介）

【紅繡鞋】その在りし日は桃の花、桃の花のような美貌であったものを、（丑）**今日は命を絶たれ、梨の花、梨の花の下で離別する。**[3]（金釵と鈿盒とを取り出す介）この金釵と鈿盒は貴妃様から副葬するよう申し付けられたものです。（生が金釵と鈿盒を見て哭く介）**この金釵と鈿盒こそ災いのもと。これがために、かつて長生殿では歓楽を極め、いま馬嵬駅ではこんなにも悲しい結末を迎えることになった。**

（丑）慌しい最中、棺材はどの様に致しましょう？（生）やむを得ん。とりあえず錦のしとねに亡骸を包み、埋葬しても分かるようにして、後日の改葬を待つのだ。この金釵と鈿盒は貴妃の衣服に結（ゆ）わえておくのだ。（丑）承知しました。（退場）（生が哭く介）

【尾声】妙香や美玉にも似た楊貴妃[4]は忽ちに消えてしまい、今生今世においてどう再会できよう。（末が登場して跪く介）陛下どうか御出発を。（生が地団駄を踏んで恨む介）へっ、朕は**四川など行かなくてもどうということはないわ。**（内

で関の声をあげ、ラッパを吹いて兵士達が登場）（丑がひそかに登場し、馬に乗った生を導いて行く介）（合唱）

【仙呂入双調】【朝元令】大空に霧が立ちこめ、旗さし物は寒風に揺らぐ。遠征の長路をのろのろ歩み、隊伍は黄塵に染まる。こうして君臣共に危難に遭うとは誰が予想しただろう。恨めしくも逆賊が叛乱をほしいままにし、戦火が燃え熾っているが、一体何時になったら、山犬や虎のような奴らを殲滅できよう。遙かに蜀の山々を望み、振り返って長安の宮城を見やれば、咫尺の間にある長安を遮って、長安を遮ってぽっかりと空に雲が浮かんでいる。

天子の御車は西行し、西のかた蜀の雲を払って進み、　章　褐
天地は薄暗く、天下は危殆に瀕している。　呉　融
楊貴妃はもはや天子に随行することは無く、　高　駢
空しくも宮中の百官がつき従うのみ。　銭　起

注

（1）原文「在天一涯」。「古詩十九首」其一詩に、「各在天一涯」と。
（2）原文「剰水残山」。杜甫「陪鄭広文遊何将軍山林十首」其五詩に、「剰水滄江破、残山碣石開」と。
（3）「楊太真外伝」に「（高）力士遂縊於仏堂前之梨樹下。」と。「梨」と「離」は同音。
（4）原文「温香艶玉」。湯顕祖『牡丹亭』「冥誓」齣に、「（生）看他温香艶玉神軽絶、人間迴別」と。

第二十六齣　献　飯

【黄鐘引子】【西地錦】（生が丑を連れて登場）悔やみ切れぬのは、美女の楊貴妃をむざむざと失ったこと。一晩中、千々の

悲しみが押し寄せて来る。朝が来て、馬の鞭を振るのも物憂く、午後になっても、誰が御飯を口にする気になれよう。寡人は慌ただしく西方へ行幸したが、昨日馬嵬駅で警護軍が出発せず、どうする術もなくて、やむなく貴妃に死を賜った。（涙する介）ああ、朕は国家の天子の尊位も空しく、ついに永遠に名の残る非情の人となってしまった。やっとのことで旅程を進め、扶風県までやって来たが、ここの鳳儀宮に駕を駐め、少し休むことにしよう。（外が老人に扮し、麦飯を持って登場）「背中を暖める心地よさを、庶民の私が天子にお会いしてお話し致し、粗末ながら美味の野芹を天子に献上することで、庶民の本来の誠意をお示ししたい。」私は扶風県の庶民郭従謹です。天子様が西方へ巡幸され、鳳儀宮に暫く休息されることを聞きました。そこで私は一椀の麦飯をこしらえ、ここに進上し、私の忠心を表すことにしました。（丑に会う介）お役人様、ご面倒ながら天子様に取り次いで下さい、庶民の郭従謹がここに麦飯を進上して参ったと。（丑が伝える介）（生）その者を召し入れろ。（外が進んでまみえる介）在野の小臣郭従謹がお目通り致します。（生）そちはいずこの者だ？（外）小臣は、

【黄鐘過曲】【降黄龍】扶風県に生まれ育ち、白髪になるまで田畑を耕し、平和な時世を喜んでおりましたが、不意に異変が起き、天子の御車が巡幸されると聞き、この上なく驚嘆致しました。そこで一椀の麦飯を持って、地に伏して行宮に献上しに参った次第です。どうか我が君には、粗末な野人の供物をお厭いになりませぬよう。

（生）ご苦労であった。高力士、持って参れ。（丑が飯椀を受け取り、生に渡す介）（生が見る介）寡人は深宮にいて、まだこんなものを味わったことがない。

【前腔】【換頭】平常ならば、宮中の大官が御膳を進め、最高級の食材を調理して食卓に並べ、山海の珍味の盛り付けにも嫌気がさすほどであるのに。（涙する介）今日はこんな物で飢えを満たすとは。侘びしくも麩（ふすま）が混じった麦飯だ。こんな飯がどうして口に入ろう？（少し口にしてすぐに椀を置く介）朕はあの滹沱河畔で道に迷い、食に窮した蕭王劉秀にも及ばないものだ。

（外）陛下、今日の災禍は一体誰のせいで起こったのでしょう？（生）誰のせいだというのだ？（外）陛下が臣の罪を許されれば、臣は敢て直言致します。（生）構わぬから言ってみよ。（外）それは、ただあの楊国忠が、

【前腔】【換頭】狂暴にも天子の外戚であることを恃（たの）み、賄賂や大権をむさぼり、天下に大毒を流したが為です。彼

は安禄山と十年来の仇敵であるので、今日安禄山のいる漁陽から叛乱が起こりました。（生）楊国忠が安禄山と仲違いし、安禄山が謀反するなど、寡人がどうして知ろう。（外）あの安禄山が久しく謀反の心を内に蔵していることは、天下の誰もが知っておりました。去年上書があって、安禄山の謀反を告発しましたが、陛下は却ってその者を誅殺されました。誰が誅伐されるのを覚悟の上で、君王に上奏しに来るでしょうか。

（生が悔やみ恨む介をする）これは朕の不明の為にこうなったのだ。

【前腔】【換頭】思えば、もっと目を開け耳を澄ましてⅠ賢者の意見を採り入れることは、君王として本来当然為すべきであった。覚えているが、姚崇や宋璟が宰相であった頃は、しばしば遠慮の無い直言が奏上され、天下万民の真情が同室にいるかのように身近に感じられた。それが、姚崇や宋璟の死後、朝廷の百官どもはひたすら官位をむさぼり、権力に取り入ろうとするばかり。郭従謹よ、彼らは、お前のような在野の民が忠義心を抱き、逆賊の安禄山や奸相の楊国忠を指弾するのにも及ばないのだ。（外）もし陛下がこの地に巡幸されなければ、小臣はどうして天顔を拝することができたでしょう。（生が涙する介）今さら後悔の臍（ほぞ）を噛んでも空しく及ばず、悔恨の思いが朕の飢えた腸（はらわた）に満ちる。

（外）陛下、しばらくお休み下さい。私めは退出致します。（歎く介）「例え辛苦のために雪のような白髪がめっきり増えても、この熱い忠誠心が灰になることはないであろう。」（退場）（副浄が使者に扮し、二名の雑が綾布をかついで登場）

【中呂】【太平令】鳥越の険しい道がくねくね続く中を、私は春の綾絹をはるばる駅路伝いに運んで来た。馬の鈴を頻りに鳴らし、山また山を越えて来たが、間もなく目指す長安である。

私は成都からの使者です。節度使の命を受け、綾絹十万匹を京都に送り届けます。聞けば、天子は扶風県に行幸とのこと。では早速参上しましょう。（丑に向かう介）お手数ながら、一言奏上して下さい。成都の使者が春の綾絹を献上にやって来たと。（丑が上奏する介）（生）綾絹は数量を点検して収め、使者は帰らせる様に。（二名の雑が綾絹をかついで進上する介）（副浄が二名の雑と共に退場）（生）高力士、将兵達を召集せよ。朕は伝えることがある。（丑）陛下から近衛軍兵士への仰せであるぞ。（衆が将兵に扮して登場）「朝は起床の太鼓の音と共に起き、夜は戦場

の馬の鞍の上で眠る。[2]」近衛軍兵士が皇帝陛下にお目通り致します。（生）兵士達よ、朕の言うことを聞いてほしい。

【前腔】突然に変乱が出来し、戦闘を避けて遠く異境にやって来た。お前達に苦労をかけて、慌ただしく行幸に従わせたが、今日は、特に考えたことがある。

（衆）一体陛下にはどのようなお考えが？（生）

【黄鐘】【黄龍袞】出征の兵士は故郷を思う、出征の兵士は故郷を思うもの。蜀への道が天に上るほど困難であれば尚更のこと。お前たちが故郷の妻子や父母を捨てて従軍してくれているのに朕は堪えられない。朕はこれから親族や宦官と共にゆっくり蜀へ行こうと思う。お前たちは今日から各自自分の家へ帰るがよい。それで、山河を跋渉する飢えや寒さの苦労をせずにすむであろう。高力士、使臣が進上した綾絹を兵士達に分け与え、旅費にするのだ。軍資が乏しいので、綾絹を分配してお金に換え、当面の食費に充てるのだ。

（丑が応じて綾絹を分ける介）（衆が哭く介）陛下のこの様な詔旨を承り、臣等は胸もはり裂けるほどです。昔から「軍を養うのは千日、功績を挙げるのは一日」と申します。臣等は、

【前腔】虎や狼のような安禄山を殲滅できず、虎や狼のような安禄山を殲滅できず、空しく熊や羆（ひぐま）のような勇将とは恥ずかしい限り。我らは生きるも死ぬも天子に随行することを願い、全軍の志気は天子のご威光によって益々盛んです。この綾絹は、我らは断じて受け取れません。どうか、お収めになり、他日の論功行賞に充てて下さい。もし我らに二心があれば、天帝が御覧になること、決して違うことはありません。

（生）お前たちの忠心は深いのだが、朕は実に忍びないものがある。やはり故郷に帰るがよい。（衆）ああ、陛下はもしや貴妃様が亡くなったために、我々への疑心がおありになるのでは？（生）そうではない。

【尾声】長安の親族もお前たちの帰りを待ち侘びているであろう。お前たちは長安に帰り、面倒だが、朕が無事であると伝えてくれ。（衆）陛下、そんなことはおっしゃらないで下さい。我らは天子に随行することを心から願っており、誓って二心はありません。（合唱）ただ逆賊をきれいに一掃して、共に長安に帰りたく存じます。

（生）日も暮れた。今夜はここに仮に宿をとり、明朝早く出発することにしよう。（衆）承知しました。

万里にわたって黄沙が軍の太鼓の音に呜ぶように舞い散る中、　　錢　起

（丑）山の端に夕日が沈もうとしている。　　駱賓王

（生）今さら後悔しても、何の役に立とう。　　韋　莊

（丑）御車を更に西に向かって進ませるのに、どうして堪えられようか。　　周　曇

注

（1）原文「明目達聡」。『書経』虞書・舜典に、「明四目、達四聡」と。

（2）原文「暁起聴金鼓、宵眠抱玉鞍」。李白の楽府「塞下曲」六首其一詩に、「暁戦随金鼓、宵眠抱玉鞍」と。

第二十七齣　冥　追

【南調過曲】【山坡五更】【山坡羊】（幽霊となった旦が前の「埋玉」折と同じ服装で、白い練り絹を首にかけて登場）馬嵬では凶暴至極な騒乱の果てに、この一生を慌ただしく終えてしまった。このひとすじの霊魂はゆらゆらとさまよい、痛ましくも一条の白絹が喉を締めつける。【五更転】栄光の一生は尽き、玄宗との誓いは破られ、この亡骸は泥土に汚れたが、ただ玄宗を思う真情は些かも損なわれていない。私はこれから黄泉路に向かう道中、それをしっかりと胸に抱いて行きましょう。

私楊玉環は天子の西行に随従しておりましたが、馬嵬駅に着いた時に、はからずも近衛軍が反乱し、直ちに私に自尽を迫りました。（泣く介）ああ、天子様は今頃どのあたりかしら？　私の幽かにただよう霊魂はこの馬嵬

駅を飛び出して、これから天子様御一行の黄塵を追って行くことにしましょう。（行く介）

【北双調】【新水令】見れば、御車は馬嵬を出たばかりであるが、僅かの距離であっても、私は追いかけて行けない。この霊魂は木の葉のように軽いのに、あの騎馬は機織りの梭のように早く走るのだ。私がぐずぐずしていると、天子の御旗は早や樹林に隠れて見えなくなってしまった。（退場するそぶり）（生が丑と二名の宮人を連れ、四名の兵士に守られて登場）

【南仙呂入双調】【歩歩嬌】はからずも楊貴妃を凶難で亡くしてしまい、その霊魂の行方の見当もつかず、道々彼女の名を呼んでもどう仕様もない。馬上から彼女の墓の方を振り返れば、両の眼から涙が止めどなくこぼれ落ちる。（丑）天子様に申し上げます。前方がお泊まりになるところです。（生が嘆く介）おお、朕はこの身さえ持て余し、傷心に苛（さいな）まれておるのに、今夜の宿など何になろうか。（共に退場）（旦が歩いて登場）

【北折桂令】蜀への古道がくねくねとうねる中、幽霊の私はただ雲を逐い、そっと風に運ばれて行く。（内を見やる科）おや、よかった。前方に天子の御車が見えるわ。これは、御車の車蓋の羽飾りが風になびいているのだわ。鳳凰の旗が風に揺らめいているのだわ。これこそ立派な翡翠の飾りのある天子の御車なのだわ。さあ、急いで追いかけましょう。（急いで行く介）願わくはこの霊魂が陛下のお席に依り憑いて、御衣の袖をしっかり引っ張りたいもの。（内で銅鑼が鳴り、風を起こす科をする）（旦が驚いて退く科）あっ、やっと御車に追いつこうとしているのに、急に疾風が吹いて来て進路を遮り、天子の姿が全く見えなくなってしまった。とてもくやしいわ。黒々とした靄が樹林を覆い遮り、はるかに続く濃霧が山河を塞ぎ隠してしまった。私はゆらゆらと、あてどなく徘徊するが、暗闇の中で、どう飛び回ったらよいのやら。

（貼が内で苦しみ叫ぶ科）（旦）あら、あちらの愁いに満ちた雲霧の中から幽霊がやって来たわ。隠れて見てみましょう。（退場するそぶり）（貼が虢国夫人の幽霊に扮して登場）

【南江児水】艶やかな花は風の前にしぼみ、栄華の生活も夢のうちに過ぎた。昔の私が風流な色事で知られたのを誰が知りましょう。今や私は香のみが残る亡骸（むくろ）となって郊外の馬嵬に横たわり、男女の情愛も断たれて黄泉の世界に転落しました。（二名の地獄の鬼が登場）こら、どこへ行く？（貼）私は虢国夫人ですよ。（地獄の鬼が笑う介）さてはお

前だったのか。お前は生前に享楽が過ぎたので、今から俺について地獄に行くんだ。（貼が哭く介）ああおお、何と辛いこと。私はこんなに怨恨が積もっております。お尋ねしますが、地獄が大きいとはいっても、私のこの愁いに満ちた霊魂を納めきれないのでは？

（雑が、苦しみ叫ぶ貼を連行して退場）（旦が急いで登場して見つめる介）あっ、今のは裴の姉さん（虢国夫人）だ。やはり乱兵にやられたのだわ。何と痛ましいこと。

【北雁児落帯得勝令】思えば曾ては、私は虢国夫人と天子のおそばで笑ったり歌ったりして寵愛を争ったものを。今日は、共に地獄に堕ちることになった。痛ましくも、私は冤罪で一命を落としたが、思いもかけず、一族のものにも災難を及ぼしてしまった。ああ、空しくも、思い出せば涙が止めどなく流れ落ちるが、この恨みがどこに消えることがあろう？　道理で、私の周囲は愁いの黒雲に閉ざされているが、これは私の積もり積もった怨みの気から成ったものだわ。（見やる科）あちらに又一人、満身血だらけの幽霊が駆けて来た。おお、怖い。悲しいことに、幽霊は一人泣き叫ぶだけで、誰も返事する者もいない。驚いたことに、私の行く冥途への道連れは、こんな幽霊ばかりなのです。（退場するそぶり）（副浄が楊国忠の幽霊に扮して走って登場する）

【南僥僥令】生前に惨殺に遭った私は、死後に閻魔大王と会うことになった。（牛頭鬼が鋼（はがね）の叉（さすまた）を手にし、夜叉鬼が鉄の鎚と鎖を手にして登場、遮る介）（副浄が走って退場）（牛頭鬼、夜叉鬼が又追いかけて登場）楊国忠、どこへ行く。（副浄）やっ、私は現今の唐朝の宰相だぞ。今し方、乱兵に殺されたのだ。お前らは何で又私の邪魔をするのだ？（牛頭鬼）この悪者め、俺は閻魔大王の命令で、わざわざお前を捕らえに来たのだ。さっさと行かぬか。（副浄）どこへ行くのだ？（牛頭鬼、夜叉鬼）地獄の酆都城の一角に行って、お前を剣の樹や刀の山で十分に楽しませてやるのだ。

（牛頭鬼が副浄を拉致し、又で副浄の背中を押さえ、夜叉鬼は副浄を縛って退場）（旦が急いで登場して見る介）ああ、あれは私の兄じゃないの。本当に可哀そうだわ。（悲しむ介をする）

【北収江南】ああ、私の明け方の短い夢はとっくに醒めてしまい、栄華はうち捨てて、罪業ばかりが残ってしまった。おお、兄がこの様であれば、私がどうして無罪であり得よう？　私の肉体は消え失せても、玄宗への情愛を懺悔し尽くすことはできないでしょう。ともあれ、見渡せば、遙か前方に道も無い。昔の馬嵬駅に行ってみることに

するわ。（舞台をぐるぐる回って行く科）再び馬嵬駅へ行こうとすれば、わが心は早くもびくびくと震えおののく。ねぐらの林へ帰る夕暮れの雀の声を聞くと、あの馬嵬の乱の兵士達の雄叫びかと聞きまがうほどだ。

（退場するそぶり）（副浄が土地神に扮して登場）「地下の黄泉の国にはいつも横死の新しい幽霊が加わり、地上の人間世界では死者を蘇生させる返魂香が仲々手に入らない。」私は馬嵬坡の土地神です。泰山の東岳帝君の詔命では、貴妃楊玉環は本来蓬莱宮の仙女であり、現今我が神界内で死去したので、特に私に命じてその肉体を保護し、魂魄を安んじ、天帝の下命を待つようにとのこと。では、彼女を探しに行こう。（行く科）

【南園林好】彼女は、贅沢な宮中にあって歓楽の時を過ごし、白粉の匂う後宮で多くの怨みを買い、一瞬の間に命を落としてしまった。私はその肉体を黄泉の国から救い出し、貴妃の魂魄を墓中に葬ってやることにしよう。（退場するそぶり）（旦が歩いて登場）

【北沽美酒帯太平令】侘びしい靄が立ち、蔓草の繁る丘を越え、一歩ずつ進んでは立ち止まる。（見る科）おや、この樹には字が書かれている。見てみよう。（読む科をする。）「貴妃様をここに葬る。」さては、私をここに埋めたのだ。おお、玉環よ、玉環！（泣く科）ただ、この冷たく侘びしい土塊と片割れの樹とが、あの婀娜なる美人の落ち行くなれの果てなのだ。私は死ぬ時に、高力士に言い付けて、金釵と鈿盒を私と一緒に埋葬させたが、果たして埋めてくれたかしら？　もし、馴染みの物が塵埃同様に捨てられているのならば、玄宗への真の愛情が私の死によっても報われないことになる。また果たして埋められているとしても、私の無惨な亡骸が金釵・鈿盒をしっかりと抱きしめているかどうか心配だわ。ちょっと呼びかけてみましょう。（呼ぶ科）楊玉環よ、そなたの霊魂はここにいますよ。私は風に向かってこっそり彼女を呼ぶ、彼女を呼ぶ。（呼ぶ科）そなたは私であるのに、おお、ずっとこうして眠ったふりをしているとは！

（副浄が登場して呼ぶ科）あの泣いている者は貴妃楊玉環の霊魂であろうか？　（旦）私がそうです。何の神様ですか？　無礼をお許し下さい。（副浄）私は馬嵬坡の土地神です。（旦）神様、私の身分を明かして欲しいのです。（副浄）貴妃よ、お聞きなさい。あなたは元来蓬莱宮の仙女でしたが、些細な過ちで俗界に落とされたのです。現在、あなたの俗世での期限は満ちましたが、蓬莱の仙山はまだ紅雲に隔てられて帰ることができません。

（旦に代わって白絹を解く科）私は東岳大帝の命によって、あなたの冤罪を解き、凡俗へ沈淪したあなたを救い出します。（旦が福礼をする科）神様ありがとうございます。私は陛下にお会いできる日が来るのでしょうか？（副浄）それは私には分かりません。（旦が悲しむ科をする）（副浄）貴妃よ、馬嵬坡にまだ他の幽霊がいるので、私は行きます。（退場）（旦）それはご苦労様。では私は馬嵬駅の仏堂に行き、暫く身を隠していましょう。（行く科）

【南尾声】私が絶命した馬嵬駅の中庭に再び来てみると、樹の根もとに流れた涙のあとがまだ残っている。こんな私が、どうして蓬莱宮へ飛んで行って、昔の仙女に戻ることができようか。

土に埋もれた怨みの亡骸に、草が茫々と茂っている。　　儲嗣宗
顧みれば、人間世界は災難の連続であった。　　薛能
馬嵬では、激しい騒乱の後に玄宗と生死の分かれをなしたが、　　韋絢
一体、いつどこで、二人一緒に来た道を帰れるであろう。　　韋莊

第二十八齣　罵賊

（外が雷海青に扮し、琵琶を抱えて登場）「今の安禄山下の武将や文官はみな旧唐朝の同僚であり、彼らが変節して安禄山の新王朝に仕えているのを恨めしく思う。唐朝の忠誠心は玄宗が作られたこの梨園内にこそ残っており、そのことで梨園の一楽士が命を惜しむことなどどうしてあろうか。」私は雷海青であります。天宝皇帝（玄宗）の御恩を蒙り、梨園内に楽士として仕えております。思わぬことに安禄山が叛乱を起こし、長安が陥落したので、皇帝は四川へ蒙塵されました。およそ唐の文官や武官は平素高官になって厚禄を食み、恩典は妻子にまで及んでいますが、[1]その栄華や富貴を享受したものの中で、朝廷の恩恵に与らなかったものがいるでしょうか。

ところが今や生に執着して死を恐れ、玄宗の恩義を忘れて、争って安禄山側に投降しようとする者が後を絶ちません。彼らは一時の安楽を貪るだけで、千古に名誉を汚すのを顧みようとしないのです。ああ、何と恥ずべき、何と恨むべきことか。私雷海青は一介の音楽士ではありますが、あんな破廉恥なことは決してできません。今日は安禄山がこれらの逆賊と凝碧池で宴会を開き、梨園の楽士を召集して演奏させるとのこと。私はこの機会に乗じて、そやつの前で大いに罵り、怒りを晴らしてやりましょう。たとえこの骨身がばらばらになっても、私は言わずにはおれません。では琵琶をかき抱いて、行ってみることにします。

【仙呂村裏迓鼓】この私は、卑しい楽士の身分で浅はかな愚か者であり、読書して文章を献上したり、科挙に及第して百官の行列に並んだ[2]こともないが、この熱い血が湧く胸の内は天子への忠誠心に満ちている。今日、国家の覆滅を眼の前にし、国家の危難に遭遇し、悲惨な動乱を経験して、私は思わず歯ぎしりして声を呑み、恨みを抱くのである。

【元和令】恨むらくは、悪辣な生臭野郎が帝位を汚し、蝦蟇野郎が身の程知らずにも白鳥の肉にありつこうとしている。やつは明白に要求した、天子様が宮殿を後にして西南に蒙塵することを。こんな粗暴な振る舞いに堪えられようか？　たとえやつを八つ裂きにして喰ったとしても[3]恨みは消えない。誰が気付こう、安禄山の一党が暗愚で、心底から凶暴な極悪人であることを。

【上馬嬌】お前らは普段は口を開けば、国への忠孝を唱えるが、危難が迫ると変節して富貴を貪ろうとする。早くから一斉に尻尾を振って安禄山側の新しい官職に就き、君主の朝敵を恩人として感謝している。私はお前らに聞きたい、そうして仮面を被って恥ずかしくはないのかと。

【勝葫蘆】明らかに、忠臣たる者はいなくなった。雷海青よ、もしお前が一担の責任を負わないならば、髪も歯もある一人前の人間として相応しくないのではないか。ただ、三綱五常の人の道を守り、鬚に恥じない立派な男であるのならば、私は何度死んでも本望だ。（退場）（浄が二名の兵士を連れて登場）

【中呂引子】【遶紅楼】俺は大唐の天下を略奪して大燕と号し、黄色の天子の礼服を身に着け、頭には天を衝く鳳冠を戴いている。これから爽やかな秋の凝碧池に梨園の弟子[4]を召集し、歌舞音曲の大宴会を楽しもうぞ。

俺様は安禄山。范陽に挙兵して以来、向かう所敵無しで、西方に長驅し、直ちに長安に至った。唐朝の皇帝は蜀中に逃げ出したので、麗しい唐の山河は我が輩のものとなった。（笑う介）何と愉快なこと。今日は百官を召集して、凝碧池で天下太平の宴会を催し、存分に楽しむことにしよう。宮人たちよ、百官は揃ったか？（雑）皆、外殿に控えております。（浄）来るように伝えよ。（兵士）承知しました。（伝える介）天子の仰せである。百官は進見するように。（四名の安禄山側の偽官が登場）「今日の新天子と、それに仕える曾ての旧官僚。ともに時勢をよく知る者であって、唐朝の恩に背く者ではありません。」（謁見する介）臣どもが朝見致します。主上にはいつまでもお健やかであります様に。（浄）皆、楽にしてくれ。俺様は今日は政務の暇に、凝碧池に特設の宴席を設け、皆と共に太平を楽しみたく思う。（四名の偽官）有り難うございます。（兵士）宴会の準備ができました。陛下には宴席に着かれます様に。（内で音楽を奏し、四名の偽官が跪いて安禄山に酒をつぐ介）（浄）

【中呂過曲】【尾犯序】龍にも似た天子が凝碧池に遊べば、五色の雲は切れ、澄んだ秋の気配がただよう。朕は宮殿内をのんびり歩き、しばし馬の鞭を停めて立ちどまる。宴会の準備のために、緋服を着た宮人が鸞刀で肉を細かく切り割き、袖をまくりあげて宴会用の料理を大皿に満載して献上しようとしている。（四名の偽官が浄に酒をつぎ、再拝する介）**この瑤池のほとりにて、我ら文武の百官が湧き出る泉のように次々に御酒を献上致します。**

（浄）宮人ども、梨園子弟に伝令して、宮楽を演奏させるのだ。（兵士）承知しました。（内へ向かう介）主上の命令である。梨園の子弟に演奏させるように。（内で応じ、演奏する介）（兵士が浄に酒をつぐ介）（合唱）

【前腔】【換頭】宮宴にあって、梨園の弟子が天宮の楽曲を演奏する。楊貴妃ありし日の霓裳羽衣曲を、今一度歌曲に合わせて演奏する。(5)**その妙なる音曲は天空の雲中に入ったかと思うと、秋風に吹かれ落ちたりする。かくも珍しい音楽は、月宮の清虚洞府を除けば、あの貴妃のいた宮中の沈香亭があるだけだ。今日この仙界の秘曲は、もう大唐年間のものではないのだ。**

（浄）うまい演奏であった。（四名の偽官）臣等思いますに、天宝皇帝は多大の心力を費やして、この曲を梨園の弟子に教えましたが、今日この曲は残されて陛下が楽しまれることになりました。真に天上の幸いであります。（浄が笑う介）お前たちの言うことはもっともだ。もう一杯酒をつげ。（兵士が酒をつぐ介）（外が内で泣いて唱う介）

【前腔】【換頭】幽州から叛乱の攻め太鼓が鳴り響き、無人の京都の家々は蓬草が生えて荒れ果て、四方に戦火を交えている。主上のいない宮殿に黄葉が落ちる中、[6]ふと奇妙な管弦の響きを耳にして驚く。本当に叛乱のために天変が起きたのであり、誠に死んだ人も生きている人も愁いや怨みが増すばかりだ。（大いに泣く介）我が天宝皇帝よ、曾て金鑾殿上では宮中の百官が天子に拝礼しておりましたが、一体何日になったら再び拝礼の日が来るのでしょうか？

（浄）おや、誰が泣いているのだ？　変なやつだ。（兵士）楽工の雷海青であります。（浄）つかまえて来い。（兵士が外を捕らえて登場し、見える介）（浄）雷海青、寡人がここで太平宴を楽しんでいるのに、お前が勝手に泣きわめくとは、本当に憎らしいやつだ。（外が大声で罵る介）おい、安禄山、貴様はもともと敗軍の将で、首を切られるべき所、幸いに天恩によって助かり、将軍に任じられたのに、貴様は皇恩に報いようとしないで、却って叛乱を起こし、神聖なる京都を汚し、天子を都から蒙塵させたのだ。この罪悪は甚大であり、日ならずして天兵が来て誅伐されるであろうのに、何が太平の宴会なものか。（浄が大いに怒る介）おお、そんな事か。寡人は天子の位に就き、服従しない臣下はいないのに、お前ごとき一介の楽工がよくもこんな無礼を働きおった。兵士よ、やつに刀を見せてやれ！（二名の兵士が応じ、刀を抜く介）（外が浄に向かい、浄を指さして罵る介）

【撲灯蛾】お前が甚だ恩義に背き、獣の心に人の面を装っているのに、私は怒り狂って逆立つ髪が冠を衝き上げるほどだ。私は卑しい楽工ではあるが、あの朝臣どものようなへなちょこではないぞ。安禄山、お前は、帝位の神器を盗み、天帝に逆らったからには、たちまち鮮血を流して屍体を晒さぬわけにはいかぬ。（琵琶を浄に投げつける介）私は、琵琶を投げつけて、この賊臣の首を砕き、開元皇帝へのご報恩とするのだ。

（兵士が琵琶を奪う介）（浄）早く此奴を捕らえてたたき切れ。（兵士が応じ、外を捕らえて斬りすてて退場）（浄）忌々しい奴め、忌々しい奴め！（四名の偽官）天子にはお怒りになりませぬ様。無知の楽工が何の意とするに足りましょう。（浄）寡人は不愉快だ。皆の者は退れ。（四名の偽官）承知しました。我々は天子を宮殿までお送りします。（跪いて送る介）（浄）「知己と飲む酒は千杯でも足らぬが、気乗りしない話は半句でも多い。」（怒って退場）（四名の偽官が起っ介）やつは死んで当然、死んで当然だ！　一介の楽工ごときが忠臣気取りをするとは。我ら太平宴に加わっている者はだめだとでもいうのか。

【尾声】皆が悪役の花臉（くまどり）をした敵の中で、一人だけの忠臣が何ができよう。（笑う介）雷海青よ、雷海青、つまるところ、お前は**官位に就いたことも無いので、見識が浅いのだ！**

秦地の決戦は、流れた血が川に成るほどの激戦であり、　　羅　隱
敗れて捕虜になるか、勝って王となるかは紙一重の偶然の為すものである。　　李　山甫
世の中に、一体誰が志を枉げずに耐え忍ぶ者を喜ぶだろうか。　　陸　希声
ただ行楽して楽しむという原点に立ち返るべきである。　　薛　稷

注

（1）原文「蔭子封妻」。湯顯祖『邯鄲記』「東巡」齣に、「重畳的蔭子封妻恩不小」と。
（2）原文「鵷班高站」。白仁甫『梧桐雨』楔子に、「位列鵷班坐省堂」と。
（3）原文「寝皮食肉」。『春秋左氏伝』襄公二十一年に、「然二子者、譬於禽獸、臣食其肉、而寝其皮矣」と。
（4）原文「梨園小部」。元・張昱「唐天宝宮詞」十五首其十詩に、「小部梨園出教坊」と。
（5）原文「旧日霓裳、重按歌徧」。南唐・李煜「玉楼春」詞に、「重按霓裳歌徧徹」と。
（6）原文「葉堕空宮」。王維「菩提寺禁、裴迪来相看説、逆賊等凝碧池上作音楽、～」詩に、「秋槐葉落空宮裏、凝碧池頭奏管弦」と。